

館蔵資料紹介 No. 11

宮澤賢治に関する林金雄コレクション

喜 多 功

第5代学長林金雄先生は、平成3年11月23日、80歳で亡くなられた。その3年前、先生は長年にわたって集められた宮澤賢治に関するコレクションを岐阜大学図書館に寄贈された。コレクションは以下のようなものから成る。

1. 賢治関係の出版物

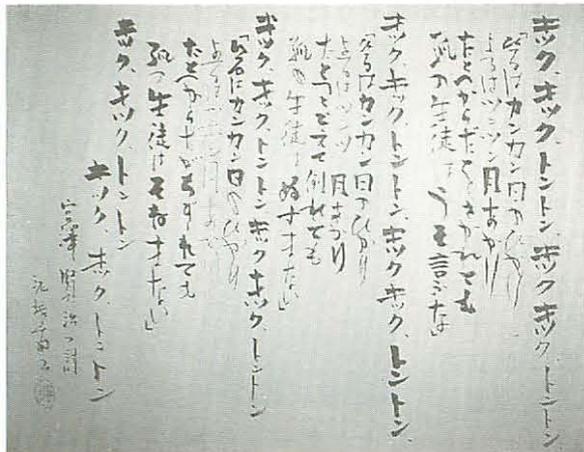
図書123点 (156冊)。雑誌, 小冊子, 抜刷21点。

2. 賢治の詩の一節を書の作品にしたもの。

「稲作挿話」(軸), 「キックキック」(未表装), 「ありとぎのこ」(折帖), 「からすの北斗七星」(和綴帖) など13点 (関谷秀太郎, 泥垢齋)。

「どどうど」(軸), 「まづもるとともに」(軸), 「病のゆゑに」(軸) など6点 (関谷義道)。

「永訣の朝」(未表装) など2点 (豊水)。



3. その他の資料

宮澤賢治手帳 (復元版), 自筆原稿コピー, 賢治卒業論文写真版, 絵画宮澤賢治像 (清水魚星), 賢治関係の写真のアルバム, 賢治に関する新聞記事のスクラップブックなど多数。

4. 1~3を展示する際に使用する手製の説明用のパネル

1は3階の特別閲覧室の中に林文庫として陳列され, 2~4は1階の特別資料室に保管されている。

賢治関係の出版物は, 先生が収集された時代には今日のように多くはなかった。コレクションには当時の代表的な出版物が揃っており, 今ではほとんど入手しえないものも含まれている。しかし, 賢治研究資料として今日いかにどの価値があるか筆者には

判らない。コレクションの最もユニークな所は上記2の一連の書の作品である。先生自身も葉人と号して書を嗜まれたが, これらは先生と親交のあった書家たちの手になるもので, これらの作品を前にすると, 無機的な活字で読む時とはまた趣が異なって, 珠玉のような賢治の言葉が深く心に沁みて来るのを覚える。また上記3と4の諸資料からは, 賢治に対する先生の並々ならぬ思い入れ, および賢治を多くの人に紹介したいという強い気持が窺われる。このコレクションは, 寄贈時の本学図書館における展示も含めて, 過去5回一般公開された。教え子の粕淵宏昭氏 (農学部昭44卒) の協力によって実現した長浜文化芸術会館における展示 (昭52) が私の記憶に残っている。

さて, 林先生は昭和55年に日本農芸化学会中部支部会で, 「宮澤賢治と農芸化学」と題して講演された。先生は沢山の詩を引用しながら, 科学者の立場から賢治の魅力を紹介された。残された自筆の講演原稿を読むと, 先生がどうして賢治を知りようになったか, 賢治のどういう所に一番魅力を感じているのか, 賢治の思想をどう見ておられるのか, などについて率直に語っておられる。以下, 先生自身の言葉でそれらを語っていただくことにしたい。

「私は, かねがね伝記と詩を読むようにつとめておりました。実験室で研究ばかりやっていると淋しくなるし, 色々のことから農芸化学を広く見たいと思うようになり, どんな先輩がいるだろうか? どんなことをした人がいるだろうか? ということに興味をもつようになり, 色々と調べているうちに, 勿論鈴木梅太郎先生のような偉大な農芸化学者を知り敬服しましたが, ユニークな一人として宮澤賢治を知りようになったのであります。そして農



芸化学が詩や童話といった広い世界につながっていることを教えられました。」

その後先生は兵隊に行って、陸軍歩兵となった。「一等兵の頃には台湾の一番南端の山地に派遣され

歩哨に立ってフィリッピン方向から敵機の来襲してくるのを望楼に登って見張っておりました。海岸にはフィリッピンに敵前上陸する日本の兵隊が集結していました。そんな時、賢治の「どうか憎むことのできない敵を殺さないでいいように（『鳥の北斗七星』）」という言葉が風によって聞こえてくるように思えましたし、私はこの言葉を静かに口ずさんでおりました。」



「日本へ引き揚げてまいりましてから、再び農芸化学をやるようになって、農芸化学の面から賢治を見たいと思いつづけてきたわけでありませう。」「賢治の残したのものには、人文科学と自然科学のすばらしい融合がみられます。人文科学の面では、児童文学（童話）とか詩といった文学の面から取り上げている人はかなり多く、かなり沢山の本が出版されていて、近年特に多いように思われます。しかし殆んど文学の領域であって、こういう領域で私のやりうることは何もないわけです。他方自然科学の面から取り上げている人は殆んどありませんでした。賢治は草野心平あての手紙の中で、「一個のサイエンチスト」といっています。詩や童話には随所に自然科学の用語がちりばめられています。誰もその真の内容へのアプローチを試みなかったようです。ところが、近年相次いで3つの書物が出版されました。」として、先生は自然科学の分野から賢治の魅力を解き明かした齊藤文一氏（超高層物理学）、宮城一男氏（地質学）、板谷英紀氏（化学）の著作を紹介し、賢治の特徴の一つは、特に詩において科学用語を駆使していること、みずみずしい美しさをもった科学用語を導入したことによって、日本語の表現の奥行きと幅を広げ深めたことを指摘している。そして農学の立場から、「自然の物質循環の体系のなかで人間活動をとらえていた賢治の考え方は示唆に富んだものといえると思います。」と結ん

でいる。

筆者が助手として本学に着任したのは、先生が農学部長を退かれた年であった。先生は若い者と議論をするのが好きだったので、言葉をかかわす機会は度々あった。また先生は一時期日本科学者会議の機関誌購読会員だったので、毎月雑誌をお届けするのが私の役目であった。われわれは賢治に対する関心ということでウマが合い、学長室でのひとときがお互いの息抜きの時間にもなった。「広い学長室にたった一人だけですわっているのは淋しいものだ。」「農芸化学から見た宮澤賢治というテーマを退職後の楽しみにしていたんだが、もう手をつける人が出てきたんだよ。」先生がもらったそんなひとことふたことが印象に残っている。最後にお目にかかったのは亡くなる3年前の夏だった。たまたまお宅に立ち寄った私に、聴かせたいものがあるといって、加古隆氏のCDをプレイヤーにセットされた。「賢治の世界を音楽にしたものだそうだが、なかなかいいだろう？」と、私の顔をのぞき込むようにされたが、ウンとうなったさきりで肯定的な返事をしなかった私にちょっと不満そうだった。

今日、宮澤賢治に対する関心はかつてなく高まっております。さまざまな角度から光があてられている。平成2年に設立された宮澤賢治



学会イーハトーブセンター（岩手県花巻市高松1-1-1、代表原 子朗）は、現在数千人の会員を擁し、機関誌の発行、セミナーの開催、前年に印刷公表された賢治関係資料の目録発行など活発な活動を行っている。今年は生誕100年にあたるが、賢治の魅力はますます輝きを増しているようである。わが大学にも早くから賢治に傾倒し、その人と思想の紹介に努めた先人がいたことを学生諸君に知ってほしいと思う。また、このコレクションを資料室に眠らせておくだけではいかにも惜しい。未表装の作品には表装を施し、来館者の目にふれる所に置きたいものである。

（きた いさお：農学部教授）

（配置場所：3階特別閲覧室）